

針が止まったままの壁掛け時計

寄贈／松井昭三

爆心地から約 3,100m 東雲町（現在の東雲町）

自宅は爆風で天井、建具などすべてが吹き飛び、この壁掛け時計もガラスが割れ、振り子は外れて止まった。外出先で被爆した松井ユクノさん(43歳)は上半身に大やけどを負い、一命は取り留めたものの生涯大きなケロイドに苦しんだ。

あの日止まったままのこの時計は、今日まで松井家の鴨居にかけて大切に守られてきた。

寄贈者(ユクノさんの息子)のお話から

あの日、私は自宅にいました。すべてが吹き飛ばされて家はがらんどうになり、呆然としていると、被爆者が続々と逃げてきました。えらいことになったと思いました。

「(母が)大やけどを負って避難している」という知らせがあり、火がボンボン燃え盛る中、夢中で母を捜しました。翌朝帰ってきた母の姿はボロボロで、幽霊が立っているのかと思うほどでした。

大やけどを負い、痛かっただろうに、一言も泣き言を言わない母を懸命に看病しました。

ようやく起き上がれるようになって、ケロイドになって引きつり、戦後何度手術しても治ることはありませんでした。母は亡くなるまで原爆の話はほとんどしませんでした。

